

# 日本語教員養成課程「海外実習」 —大学連携日本語パートナーズ—

青木ひろみ  
Pornsri Wright  
小川 翔平

## 要 旨

神田外語大学の日本語教員養成課程「海外実習」は、2009年度から交換留学協定校であるタイのブラパー大学と連携し、毎年事前準備を行った上で夏期休暇期間に3週間実習生を送り出している。「海外実習」の参加者は、過去9年間で36名になる。この「海外実習」は2年目以降、国際交流基金の「海外日本語教育インターン派遣プログラム」により公的支援を受けているが、現在は「大学連携日本語パートナーズ派遣プログラム」と改められ実習生にもその役割が期待されるようになった。背景には、日本政府が2013年12月に表明した「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト」による「日本語パートナーズ派遣事業」がある。本稿は、この新たな指針に対応して、2017年度ブラパー大学での実習期間中に「日本語パートナーズ」活動として大学附属のインターナショナルスクールと連携し、実施した「共同プロジェクト」の経緯、活動内容、さらに成果について報告する<sup>1</sup>。

## 1. はじめに

神田外語大学の日本語教員養成課程（以下、養成課程）「海外実習」は、2009年度から交換留学協定校であるタイのブラパー大学人文社会学部東洋言語学科日

---

<sup>1</sup> 本研究は2017年度神田外語大学研究助成を受けて実施した。研究成果は、タイ国日本語教育研究会第30回年次セミナー分科会（2018年3月17日）で報告した。

本語科（以下、ブラパー大学）と連携し、毎年事前準備を行った上で夏期休暇期間に3週間実習生を送り出している（青木, 2011）。2年目以降は国際交流基金の「海外日本語教育インターン派遣プログラム」に採択されており、実習生は渡航費や滞在費他の公的支援を受けている。このプログラムは現在「大学連携日本語パートナーズ派遣プログラム」（以下、「大学連携プログラム」）と改められ<sup>1</sup>、実習生にもその役割が期待されるようになった。本研究は、この公的支援による「海外実習」の新たな位置づけに対応して、実習の一環として実践可能な「日本語パートナーズ」活動について検討する目的で行った<sup>2</sup>。

まず初めに、これまで実践してきた「海外実習」の概要について説明する。次に、現在「海外実習」の公的支援を受けている国際交流基金の「大学連携プログラム」について、また日本政府の「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト」による「日本語パートナーズ派遣事業」<sup>3</sup>との関連について概略を述べる。さらに、2017年度「海外実習」期間中に、「日本語パートナーズ」活動としてブラパー大学附属インターナショナルスクール（Piboonbumpen Demonstration School of Burapha University International Education Program）（以下、インターナショナルスクール）と連携し、実践した「共同プロジェクト」の経緯、活動内容、さらに成果について報告する。

## 2. 「海外実習」の概要

### 2-1. 参加条件

「海外実習」（単位認定）は養成課程の前期科目として開講し、事前準備（週1コマ）とブラパー大学での実践活動（3週間）からなる。参加条件は養成課程

<sup>2</sup> 旧「海外日本語教育インターン派遣プログラム」は、2017年度に「大学連携日本語パートナーズ派遣プログラム」となり、派遣先の国・地域がASEAN10カ国（及び中国・台湾）と限定された。

<sup>3</sup> 本学キャリア教育センターは、2016年度に「日本語パートナーズ派遣事業」に関する連携協定を締結し、推薦枠（タイ2名、インドネシア3名）を設けている。本プロジェクトの一環として、現地での「日本語パートナーズ」の活動を理解する目的で、養成課程の学生が派遣されているタイのシャナソンサーンウィッターヤー校（Chanasongsarn Whitthaya School）を視察した。

の必修科目である「日本語教育実習」（以下、「教育実習」）の単位（2単位）を取得済みであることが挙げられる。この「教育実習」では、都内の日本語学校と連携し、学期初めに「文法クラス」と「会話クラス」の見学、学期末に「会話クラス」で教壇授業を行っている。その間、約1ヵ月半掛けて、実習生同士の相互学習を通して教案作成と模擬授業を行い、問題点を修正している。実習生はその都度、録画したビデオを見てフィードバックの内容を振り返り、自身の学習に対する内省の方法、手順を具体的に、また段階的に学ぶことを目的としている。このような学習経験を積んだ実習生が、さらに「海外実習」として現地の教育現場で学習者それぞれのニーズや動機づけ、実際の学習環境や授業運営など、その多様性に触れながら日本語教育への理解と関心を深めていくのではないかと考える（佐藤, 1996; 佐藤, 1999; 田島, 2003; 青木, 2012a; 青木, 2012b）。

## 2-2. 参加者

「海外実習」の参加者は過去9年間で36名になる。次の表1は、各年度の参加者数と学年、学科別内訳を示している<sup>4</sup>。2011年度は10名と最も参加者が多いが、それ以外の年は2名～6名となっており、英米語学科を中心に全学科の学生が参加している。

---

<sup>4</sup> 2012年度入学者から、「英米語学科」「国際コミュニケーション学科」「アジア言語学科（中国語、韓国語、インドネシア語、ベトナム語、タイ語）」「イペロアメリカ言語学科（スペイン語、ブラジルポルトガル語）」に改編された。

表 1 「海外実習」参加者

年度	人数 (学年別人数)	学科別内訳
第 1 回 (2009)	2 名 (4 年生・2 名)	英米語 2
第 2 回 (2010)	2 名 (4 年生・2 名)	英米語 1 中国語 1
第 3 回 (2011)	10 名 (4 年生・7 名) (3 年生・3 名)	英米語 5 国際コミュニケーション 2 国際言語文化 (ブラジルポルトガル語) 2 韓国語 1
第 4 回 (2012)	4 名 (4 年生・4 名)	英米語 1 国際コミュニケーション 1 中国語 1 国際言語文化 (タイ語) 1
第 5 回 (2013)	6 名 (4 年生・4 名) (3 年生・2 名)	英米語 5 国際コミュニケーション 1
第 6 回 (2014)	4 名 (4 年生・4 名)	国際言語文化 (ブラジルポルトガル語) 3 スペイン語 1
第 7 回 (2015)	2 名 (4 年生・1 名) (3 年生・1 名)	英米語 1 国際コミュニケーション 1
第 8 回 (2016)	3 名 (4 年生・2 名) (3 年生・1 名)	英米語 2 国際コミュニケーション 1
第 9 回 (2017)	3 名 (4 年生・3 名)	アジア言語 (タイ語) 3
合計	36 名 (4 年生・27 名) (3 年生・9 名)	英米語 17、国際コミュニケーション 6、 アジア言語 7 (タイ語 4、中国語 2、韓国語 1)、 イベロアメリカ言語 6 (ブラジルポルトガル語 5、スペイン語 1)

表 1 の参加者は、日本語教師を目指す学生だけではなく、先に述べた「教育実習」で学習経験を積み、さらに海外での日本語教育についても知りたい、また自身が将来帰属する社会や地域で日本語を必要とする学習者を支えていきたいと考

えている。外国語を主専攻として学ぶ一方で、母語である日本語を外国語として見ていくことにも関心を示している。学習意欲が高く、日本語学校でインターンを行ったり、「教育実習」「海外実習」後に授業でサポーターを努めたりするなど、その活動の場を広げている。（『日本語教育実習報告書』2010～2017；青木, 2018）。

### 2-3. 受け入れ機関の状況

先に述べたように「海外実習」は、本学での事前準備とブラパー大学での実践からなる。過去9年間には、受け入れ機関であるブラパー大学では下記の表2に示した(1)「学期」、(2)「専攻」、(3)「1年生入学時の日本語力」について改正があり、その都度対応をしながら継続してきた。

表2 受け入れ機関（ブラパー大学）の状況

変更点	2009年度	2017年度現在
(1) 学期	1期：6月初旬～10月初旬 2期：10月下旬～3月上旬	1期：8月初旬～12月初旬 2期：1月初旬～5月中旬
(2) 専攻	主専攻と副専攻	主専攻のみ
(3) 入学時の日本語レベル	初級前半終了	初級後半終了

ブラパー大学は2学期制で、「海外実習」の連携を開始した2009年度1期は6月初旬～10月初旬まで（2期は10月下旬～3月上旬）であった。実習生の参加はブラパー大学の学期の半分が終了し、後半の授業が始まる落ち着いた時期であった。しかし、2013年度から1期は8月初旬～12月初旬（2期は1月初旬～5月中旬）に改められたことで、学期が始まって約3週間後に送り出さなければならなくなった。また、当初日本語科には主専攻と副専攻が設けられていたが、同年主専攻のみに変わった。さらに、2015年度には1年生入学時の日本語レベルも変わり、それまでの初級前半終了から初級後半終了と高くなった。これらの変

更は、実習生を送り出す側の事前準備にも、その都度対応が必要であることを意味する。

その一方で、両校の話し合いにより授業外の活動として、実習期間中に「学習サポート」の時間を設けることができた。これは各授業の担当教師の指示によるもので「学生の宿題の手助けやテストの解答を再チェックする」「読む練習や発音、アクセントの練習をする」「学生が実習生に質問したいこと、話したいことを準備して参加する」などが挙げられる。日本語母語話者とコミュニケーションを取る機会が少なく、また授業内では積極的に話す自信がない学生にとっては、授業外で緊張せずに日本語が使える機会となった。また、日本語を積極的に使いたい学生には、自身の日本語力を試す機会を与えることができた。これは、毎年学生に行っているアンケート結果にも表れている。実習生にとっても、個々の学生の性格や日本語の習得度などを知る機会となり、そこで得た情報を次の授業に生かすことができ、双方に有益であった<sup>5</sup>。このように「海外実習」の実践は、それぞれの状況に対応しながら、より成果があるプログラム作りを目指してきた(青木, 2012b; 中山, 2012)。

#### 2-4. 送り出す側の準備

実習生を送り出す側としては、現地での活動をより円滑に進めるために、毎年担当する授業を「教壇科目」と「アシスタント科目」に分けて事前準備を行っている<sup>6</sup>。その年によって多少異なるが、「教壇科目」は概ね次の表3に示したようになる。1年生の「Japanese I」「Japanese Listening-Speaking I」、2年生の「Japanese III」、「Japanese Listening-Speaking III」は、ブラバナー大学のシラバス(週1回、3コマ)に基づき準備する。一方、3年生の「Japanese Culture」、4年生の

<sup>5</sup> 日本語科の時間割の変更により、現在この活動は行われていない。

<sup>6</sup> 「アシスタント科目」には「Japanese Phonetics & Phonology」「Japanese Writing for Business」「Japanese Reading」「Japanese Communication for Carriers」他がある。

「Japan Today」は担当教師のリクエストで、大学生の視点から現代の日本社会や日本人の生活、行動様式についてテーマを選び（週 1 回、1 コマ）、事前準備を行っている。

表 3 「教壇科目」と事前準備

学年・科目名・使用テキスト	事前準備
1 年生「Japanese I」「Japanese Listening-Speaking I」 2009～2013『みんなの日本語初級 I』（後半） 2014～2016『みんなの日本語初級 II』 2017『初級から始めよう日本語会話トレーニング』	各課の教案：文法確認、語彙の導入と練習、文型の導入と練習、例文作り、パワーポイントの作成
2 年生「Japanese III」「Japanese Listening-Speaking III」 2009～2013『みんなの日本語初級 II』 2014～2016『ニューアプローチ中級日本語基礎編』 2017『会話に挑戦中級前期からの日本語ロールプレイ』	各課の教案：文法確認、本文理解、語彙・文型・表現の確認、例文作り、会話例作り、パワーポイントの作成
3 年生「Japanese Culture」 『なぜ、日本人は？ 答えに詰まる外国人の質問 178』	各テーマに基づいた教案：導入と授業の流れの確認、グループ活動、予習課題とワークシートの作成、パワーポイントの作成
4 年生「Japan Today（開講は 2014 年まで） 『日本とことん見聞録』NHK デジタル教材 ( <a href="http://www.nhk.or.jp/syakai5/ja/frame.htm">http://www.nhk.or.jp/syakai5/ja/frame.htm</a> ) 『読み書きのツボ』NHK オンライン教材 ( <a href="http://www.nhk.or.jp/kokugo/tsubo/">http://www.nhk.or.jp/kokugo/tsubo/</a> )	

上記の「Japanese Culture」「Japan Today」では、それぞれ次の表 4 のようなテーマを取り上げている。

表 4 授業のテーマ

Japanese Culture: 日本の食事のマナー、着物・手ぬぐいの柄の意味、日本の地方と方言、家紋、日本の卒業式、日本の観光地、和食器と食事のマナー、相撲、回転ずし、ご当地キャラクター、電車、お土産、理容室と美容室
Japan Today: 日本の大学生生活、日本の大学生が考える親友、商品名の擬音語・擬態語、若者言葉、就職活動、大学生のアルバイト、習い事、お弁当とお弁当箱、結婚、カフェ

事前準備は、まず実習生各自で取り上げたいテーマについて情報を収集し、実際にどのような流れで進めるかを話し合う。その後、教案とパワーポイントを作成し、模擬授業を行いながら問題点を修正していく。実際の授業では、前半は実習生が各テーマに従って日本文化や日本事情の説明をし、後半は学生をグループに分けタイと比べながら自由に意見や感想を述べる形を取っている（国際交流基金, 2010）。活動を円滑に進めるため、授業を担当する1週間前に学生にテーマを知らせ、予習課題（語彙を調べる、タイの文化や事情について答える）を渡している。授業に参加する学生も準備をして臨むことで、意見が述べやすくなるよう授業作りを行っている。学生は実習生が準備した各テーマに関心を示し、楽しみながら日本の文化や習慣を学んでいることが、アンケート結果から分かっている。実習生にとっても学生の反応は新鮮であるだけでなく、同じ外国語学習者として学ぶ意欲や姿勢の違い、学生のコミュニケーションの取り方などから、自身の学習を見直す機会になっている。このように、日本とタイの同世代の学生同士が授業を通して日本語でコミュニケーションを取る活動は、双方に学習意欲を促している（青木・Pornsri, 2013; 青木・Pornsri, 2014）。

送り出す側の事前準備は授業面だけではなく、実習生が生活面で不安を感じることなく、現地で実習活動に専念できるよう体制を整えている。夏期集中講義で開講している「トライタイ語」（15コマ）では、タイ語の基礎を学びながら文化的な側面も知ることができる。また、大学生が自由に使える学内の施設 MULC（Multi Cultural Center）を利用して、交換留学生（ブラパー大学、チェンマイ大学）から言語を教わるだけではなく、タイの大学生生活や授業の様子などを聞くことができ、自身の授業準備にも役立っている。実習生がタイ語専攻の学生ではない場合は、出発前にタイ人の先生によるタイの文化や習慣について学ぶ特別講義も設けている。このように現地の事情について理解し生活ができるようにして送り出すことは、「海外実習」の継続を支える上で重要な側面となっている。結果として、受け入れ機関の負担を増やさずに、実習生が滞在する期間双方にとつ



て有効な活動ができるよう話し合い、成果を上げてきた (Pornsri, 2012)。

### 3. 「海外実習」に対する公的支援

「海外実習」が公的支援を受けている国際交流基金の「海外日本語教育インターン派遣プログラム」の趣旨は、下記の通りである。

日本国内の大学・大学院・短期大学で日本語教育を専攻する学生を海外の日本語教育機関に日本語教育実習生（インターン）として派遣し、海外で日本語を学んでいる学生や一般の日本語学習を支援すると同時に、派遣するインターンに日本語学習の現場を経験する機会を提供する。

上記に加え、本学のように ASEAN 諸国で「海外実習」を行う大学の支援については、「大学連携プログラム」と名称を改め、下記のように新たな位置づけを示した<sup>7</sup>。

ASEAN10カ国へのインターンについては、東京オリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年度まで、日本とアジア諸国との文化交流の促進・強化を目指し、現地日本語教師・学習者の支援をする「大学連携プログラム」として派遣する。

その背景には日本政府が 2013 年 12 月の日・ASEAN 特別首脳会議において表明した新しいアジア文化政策「文化の WA（和・環・輪）プロジェクト」があり、国際交流基金アジアセンターによる「日本語パートナーズ派遣事業」として行われている。これは先の説明した ASEAN10カ国の中等教育機関において、「現地の

---

<sup>7</sup> 国際交流基金の報告では、2016年度は ASEAN10カ国に20大学79名、また ASEAN10カ国を除く国・地域には49大学384名が派遣されている。

日本語教員の授業アシスタントや日本文化の紹介等の活動を行う日本語パートナーズを3,000人派遣する」という事業で、下記の3つの役割を示している。

- (1) 主に中等教育の日本語の授業で現地教師や生徒のパートナーとして授業のサポートをする。
- (2) 派遣先の生徒や地域の人々への日本文化紹介を通じて交流を行う。
- (3) 現地の言語、文化を学び、体験を日本に伝える。

2017年度の「大学連携プログラム」の選考に関しては、「“日本語パートナーズ”としての趣旨及び活動内容をよく理解していること」、具体的には「日本語学習者と日本人の交流の機会の増大」と明記している<sup>8</sup>。申請書類には派遣前の「事業計画書」の提出、また派遣終了後に「事業実施完了報告書」として本学の全般的評価、受入機関であるブラパー大学の評価に加え、参加した実習生自身の評価提出が義務付けられている<sup>9</sup>。

一方、学内では実習生が帰国後、在校生、教職員に向けて報告会の実施、本学ホームページでの紹介、毎年作成している養成課程の『日本語教育実習報告書』にも掲載している。さらに、タイ国日本語教育研究会年次セミナーでも報告し、学外の発信にも努めている（青木・Pornsri, 2013; 青木・Pornsri, 2014; 青木・Pornsri・小川, 2018）。このように実習生が公的支援を受け、充実した「海外実習」を継続していくためには、今後タイの中等教育機関とも連携し、さらに双方にとって意義のある具体的な活動を検討することが必要であろう。

---

<sup>8</sup> 2016年度、2017年度は現地活動費も支給された。

<sup>9</sup> 本学との連携により、ブラパー大学からは毎年日本語専攻の学生1名が国際交流基金（関西国際センター）の「日本語パートナーズ（大学生訪日研修）」に招聘されている。

## 4. 共同プロジェクト

### 4-1. 経緯

インターナショナルスクールはブラパー大学のキャンパス内に位置していることから、実習期間中でも訪問が可能である。幼稚園生から高校生までが通う一貫校で、普通科と国際科が設けられている。国際科には選択科目として日本語と中国語があり、日本語の授業（小学生は週1コマ、中高生は週2コマ）は英語と日本語で行われている。

交流のきっかけは、2015年度の実習生（2名）がブラパー大学で実習期間中に日本文化（「華道」「茶道」）について紹介する依頼を受けたことにある。昼休みの時間帯を利用して訪問し、インターナショナルスクールが準備した道具（花瓶はペットボトルで代用、茶筌、柄杓、お菓子）を使って説明し、参加者は自由に体験活動を行った。翌2016年度は「海外実習」の一環として計画を立て、事前準備を日本語と英語で行った。ブラパー大学での実習の時間割を優先し、実習生（3名）は2回訪問して学生も楽しみながら活動ができるよう、「子供の日とひな祭り」「生け花と日本手ぬぐい」について紹介した。それぞれの内容は、次の表5に示した通りである（『日本語教育実習報告書』2015, 2016）。

表5 実習生の活動

2015年度「海外実習」（実習生2名）

9月10日：12:00～13:00（学生、教師が自由に参加）

(1)「華道体験」：生け花の手順を説明した後、学生が好きな花を選んでペットボトルに生けた。全体のバランスと最終的なイメージを想像して生けるようにした。終了後、希望者はペットボトルごと持ち帰った。

(2)「茶道体験」：茶道の作法を全て英語で説明するのは難しかったので、主にお茶のたて方と味わってもらうことを中心に行った。参加者が多かったので挨拶、飲み方を説明した後、長机に着いて半分がお茶をたて、もう半分が飲むようにした。参加者は自由に入出し、その都度同じ説明を繰り返した。

2016年度「海外実習」(実習生3名)

(1) 8月25日: 13:20~14:20 (中学生、高校生14名)

「子供の日とひな祭り」: 日本の「子供の日とひな祭り」の習慣、祝い方(食べ物、飾り物など)について説明した。折り紙で「兜」を折り、「鯉のぼり」の歌を歌った。

(2) 9月2日: 12:20~13:20 (中学生6名)

「生け花と日本手ぬぐい」: 生け花の歴史、花を生ける手順を説明した後、学生が好きな花を選んでペットボトルに生けた。全員で作品を鑑賞し、テーマは何か考えた。日本手ぬぐいの用途、柄の意味から日本文化の説明をし、学生はタイの文化が分かる柄を画用紙に書いた。

上記の実習生の活動も、「日本語パートナーズ」としての役割を果たしていると言えるであろう。これらの経験をもとに、両校の担当者間で活動を見直し、新たに「共同プロジェクト」として取り組んだ。

#### 4-2. 概要

2017年度の「海外実習」は、ブラパー大学で例年通り3週間(8月18日~9月9日)実施し、この期間にインターナショナルスクールを訪問し「日本語パートナーズ」活動を行った。まず、学期の初めに本学で両校の担当者が話し合いを行い(4月19日)、さらに「海外実習」に参加する実習生も加わって(4月20日)共通のテーマを「祭り」に決めた。インターナショナルスクールでは、中学1年生(7名)と高校1年生(3名)の授業で実践することとした。実習生は「日本の夏祭り」について日本語で説明し、中高生(以下、学生)は「タイの祭り」について日本語で発表することを目標とした。実習生が訪問し共に活動することが、英語と日本語で学んでいる学生にとってさらに日本の文化や言語について関心を持つ機会となれば、今後の学習の継続にも繋がっていくことが期待できる。5月以降はその都度連絡を取り合い、双方の進捗状況を共有しながら進めた。

##### 4-2-1. 実習生の準備

実習生の準備は、まず学生の日本語のレベル(『みんなの日本語初級I』10課

程度)に合わせて、自己紹介用のパワーポイントを作成した。学生の関心を引くよう、実習生が持っているタイ語のニックネームについても説明した。次に、「日本の夏祭り」の雰囲気が伝わるよう動画を選び、その後取り上げる内容と手順を考えた。提示する語彙(名詞 11 語、形容詞 9 語、動詞 5 語)と文型を決め、教案を作成した。各名詞は写真と文字カードで確認することにした。活動後もその内容が思い出せるよう、作った文型を模造紙に1つずつ貼ってまとめることにした。日本語の話し方、語彙の提示と確認の方法、模造紙に貼る位置の確認など詳細に計画を立て、模擬授業を行って確認した。学生が発表した内容を再確認するワークシート(いつ、どこで、どんなことをするのか)も準備した。最後に、教室内で「日本の夏祭り」を体験する活動として、「あんず飴」の試食と「水風船と射的」の遊びに必要な道具を揃えた。実習生はブラパー大学の「教壇科目」の準備も行っていることから、インターナショナルスクールでの活動についても手順を踏んで進めることができた。

#### 4-2-2. タイ人学生の準備

日本語を学ぶ学生の動機は、「日本のアニメ、マンガに興味がある」「日本へ旅行したい」「親が日本人」「日本の大学へ進学したい」、またもう一つの選択外国語である「中国語(漢字)は難しそう」という点を挙げている。このような「共同プロジェクト」を行うのは初めての試みであることから、先に述べた担当者間の事前の話し合いの内容を持ち帰り、発表までに必要な指導の手順とその内容について具体的に検討した。日本語学習経験が浅い学生が日本語で発表する目的を下記の4つに定めた。

- (1) 学習した文法を使用して発表をすることで、表現の定着を図る。
- (2) 実習生と活動を行うことで、学習意欲の向上を図る。
- (3) タイの文化について発表する。
- (4) 日本の文化を知る。

学生の日本語のレベルに合わせて教師が発表の定型を用意し、そこに学生が自由に言葉を入れていく形を取った。「タイの祭り」についての発表は、中学生は3グループに分け、それぞれ「ソクラン 1」(伝統的な水かけ祭り)、「ソクラン 2」(近年の水かけ祭り)、「ロイクラトン」(灯籠流し)について、また高校生は全員で「アサラハブーチャ」(三宝節)について発表することにした。スライドの作成や発表時の注意点、さらに自己紹介と発表用のスクリプトを作成した。リハーサルを行うまでの過程では、それぞれの課題も見つかった。当日の活動の流れについては、実習生と動画やパワーポイント、体験活動で使用する道具の確認をした。学生の準備の流れをまとめると、次の表6のようになる。

表6 学生の準備の流れ

5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表活動を行うために必要な内容と手順の検討</li> <li>日本語のレベルが初級であることから、発表の定型を教師が用意しそこに言葉を当てはめていくことで形を作った。文法は初級レベルの形を使い、語彙はレベルを超えていても良いことにした。</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表する「祭り」について(期間、場所、参加者、特徴、使う道具)             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 発表方法: ビデオ、ポスター、パワーポイントから選ぶ。 →全グループがパワーポイントでの発表を選択した。</li> <li>(2) 情報収集: 単語はタイ語と英語で辞書で調べて、日本語にした。既習の文法を使って表現できるものは日本語で書き直した。 →学生自身の力で日本語にできない文章に関しては英語のまま残し、次回の準備授業で必要な表現を教えることとした。</li> </ol> </li> <li>・スライド作成について →パソコンの操作やパワーポイントソフトの使い方は知っているが、効果的な作成法を身に付けていないことが分かった。 →Wikipedia から文章をそのまま抜粋してスライドに入力し、全てのスライド、文字、絵にアニメーションを付けてしまった。特に中学1年生は問題が目立った。</li> <li>・良いプレゼンテーションについて             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) スライドに文章を書き過ぎないよう、1スライドにつき内容は1つにする。</li> <li>(2) 写真を見せるのではなく、話すことを意識する。</li> <li>(3) 聞いている人に質問をする。</li> <li>(4) 笑顔で話す。 →日本語力の不足もあり、思うように情報をまとめていくことができなかった。</li> </ol> </li> </ul>

7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表用スクリプトについて「自己紹介」と「祭り」について、『初級からの日本語スピーチ』（2004）を参考に作成した。</li> <li>→自由な発話とはならないが、初級の文法を使用しながら発表することを目標にした。</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクリプトの作成とリハーサル</li> </ul> <p>プレゼンテーション用に写真と合わせてファイルを作成し、リハーサルを行った。実習生が「日本の夏祭り」で説明する動詞と形容詞を教えた（名詞は実習生が導入）。</p>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習生と打ち合わせ</li> </ul> <p>当日の授業の流れと教室で行う体験活動の確認を行った。</p>

#### 4-3. 当日の活動と結果

当日（9月5日）の活動は、下記の表7の手順で中学1年生と高校生1年生の授業でそれぞれ行った。活動全体は実習生がリードし、必要に応じて担当教師が補助に入った<sup>10</sup>。

表7 活動の流れ

9:30～10:30 中学1年生（7名） <sup>11</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介、テーマの導入をした後、「日本の夏祭り」の動画を見せる。</li> <li>・語彙を確認し、模造紙に貼って文型を示す。</li> </ul>
10:40～11:40 高校1年生（3名）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「タイの祭り」について、パワーポイントを使って紹介する。</li> <li>・ワークシートに発表内容を書いて再確認する。</li> <li>・「日本の夏祭り」の遊びを体験する。</li> </ul>

まず、実習生、学生の順で自己紹介から始めた。次に、「日本の夏祭り」について動画で紹介した後、文字カードと写真を見せながら学生と名詞の確認をし、それに動詞を付けて文型を完成させた。事前準備の計画通り模造紙に貼って1つずつ文型を完成させ、授業後学内に掲示した。学生もそれぞれ準備した「タイの

<sup>10</sup> 活動当日は本学教員が帯同した。実習生が振り返りを行うことを目的に、許可を得て活動の様子を録画した。

<sup>11</sup> 選択外国語で中国語を学んでいる中学生8名も参加した。

祭り」について、パワーポイントを使って発表し、実習生が準備したワークシートで各内容を再確認した。最後に、実習生が補助しながら「日本の夏祭り」の遊びを体験した。

今後の参考にするため、学生にタイ語でアンケート（5段階評価）を行った。下記の表7に示したように、(1) テーマ「日本とタイの祭り」、(2) 実習生が使用したパワーポイント、(3) 実習生の日本語の説明とした。また、(4) 実習生との距離感（先生ではなく大学生と共に活動したこと）、(5) 実習生が複数だったこと、さらに(6) 自身の発表経験、(7) 日本語学習について聞いた。

表8 アンケートの結果（10名）

(1) テーマ：	とても良かった	…4	良かった	…5	普通…1
(2) パワーポイント：	とても良かった	…6	良かった	…2	普通…2
(3) 日本語の説明：	よく分かった	…5	分かった	…4	普通…1
(4) 実習生との距離感：	全然緊張しなかった	…7	あまり緊張しなかった	…2	普通…1
(5) 複数の実習生：	とても良かった	…5	良かった	…5	
(6) 発表経験：	とても良かった	…6	楽しかった	…3	普通…1
(7) 日本語学習：	もっと勉強したい	…4	勉強したい	…5	普通…1

学生は上記のようなアンケートに答えた経験はないが、活動全体を総合的に見ると「とても良かった」「良かった」という意見が挙げられた。さらに、担当教師から全体の活動（表9-1）、また学生自身の発表（表9-2）について感想を聞いた。

表9-1 全体の活動について

中学1年生	I like the activity but I cannot understand Japanese./The activities were very good and a lot of fun./I gained a lot of knowledge./I could see a lot of nice pictures./I don't like to eat sour thing./We had fun games to play.
-------	--



高校1年生	I had a good experience and able to learn many things./Teachers way of speaking was easy to understand./The activities were very good and fun./There were lots of Japanese games but there was a strange sour thing./It was a bit stress and I tried to relax./The presentation was good. The festival was amazing, but I didn't understand.
-------	--

表9-2 発表について

中学1年生	It was very good./It was a good program. I like it./We need to have more time to prepare./I would like to have the program like this again because it was fun and interesting./I think it was not too hard.
高校1年生	This was our first time. Next time we will try to do our best./It was a little bit pressure.

上記の内容から、全体の活動については「良かった」「楽しかった」という意見が多かったが、日本語が難しく内容が理解できなかったと感じた学生も見られた。「日本の夏祭り」の体験を楽しんだ一方で、「あんず飴」の試食だけは不評であったが、未知の食べ物を通して新たな疑問と興味を抱くことができたのではないかと思われる。

準備期間を含めて学生がそれぞれ行った発表についても、「とても良かった」という意見があり、活動全体を楽しんだだけでなく「日本語で発表を行ったことで達成感を得た」「日本についても調べて発表したい」という意欲に繋がったことが分かった。前半は緊張している様子が見られ、日本語で発表の準備をしていたにもかかわらず、英語になってしまうこともあった。一方、緊張感を持って発表したことで、結果として達成感に繋がったと思われる。日本語を理解するという点では難しいと感じることがあっても、互いに協力して実習生の質問に答えようとする積極的な姿勢が楽しい活動に繋がり、この発表経験がさらに学習への刺激となった。後半は緊張もほぐれ自然体で楽しんでいる様子が見られた。実習生が丁寧に準備した活動計画が、学生の参加を促し活発な雰囲気の中で終了したことで全体の印象も良かった。学生を指導する立場からは、日本語の発音が不明瞭であると発表内容も上手く伝わらないことが分かり、改めて考えていきたい。

結果として、実習生は「日本語パートナーズ」としての役割を十分に果たし、また学生が「日本語で発表する目的」も達成することができたのは、「共同プロジェクト」の成果と言える。実習生との日本語による交流を通して、学生は「できる、分かる」楽しさを経験することで、さらに「知りたい、学びたい」という学習意欲の継続にも繋がる可能性は大きいのではないかと考える。

## 5. まとめ

本稿は、「海外実習」に参加する実習生が公的支援を受けている「大学連携プログラム」の新たな位置づけから、実習期間中の「日本語パートナーズ」活動について取り上げ検討した。まず、これまでブラパー大学との連携で9年間実施してきた「海外実習」について、その履修条件、参加者、受け入れ機関であるブラパー大学の改正点を説明した。現地で円滑な実践活動を行うためには、受け入れ機関の状況に合わせた事前準備が必要である。そのために「教壇科目」と「アシスタント科目」に分けていること、実習生自身がテーマを考える「Japanese Culture」「Japan Today」の準備について具体的に説明した。また、事前準備の必要性は授業面だけではなく、生活面についても同様である。

次に、本研究の背景となった「大学連携プログラム」について、また「日本語パートナーズ派遣事業」との関連についてその概略を述べた。2015年度、2016年度「海外実習」期間中にインターナショナルスクールを訪問し活動を行った経緯から、2017年度は「日本語パートナーズ」活動を見直し、「共同プロジェクト」として実施した。担当者間での事前の話し合い、それぞれの準備、当日の活動の様子についても説明した。実際の活動については、学生のアンケートと聞き取りの結果から当初の目標を達成することができたと考える。実習生にとってはブラパー大学で授業経験を積む一方で、インターナショナルスクールで日本語を学ぶ学生の実際を知ることができ、教える立場、学ぶ立場双方の視点から日本語教育の多様性についてより理解を深めたと思われる。これを今後の「海外実習」の

コースデザインの作成、事前準備に生かしていきたい。

また、本学が「日本語パートナーズ派遣事業」と締結している学内推薦者の選考、採用後の指導においても、「日本語教育の視点を持った人材」の育成を担う養成課程の立場からその役割を果たしていきたい。日本に在住する外国人の増加、学習者の多様化に対応していくためには、卒業後日本語教育に直接携わるか否かにかかわらず、外国語を主専攻として学ぶ学生が在学中に養成課程を履修する意義と社会的に貢献していく可能性は大きいと言える。

## 参考文献

- 青木ひろみ（2011）「海外「日本語ティーチング・アシスタント」プログラムの構築—神田外語大学とブラパー大学の連携プロジェクト—」『神田外語大学紀要』第23号，93-112.
- 青木ひろみ（2012a）「相互学習による「日本語教育実習」カリキュラム・デザイン—日本語学校との連携から—」『神田外語大学日本語教員養成課程の展望—「日本語教育実習」の多様化及び地域（国内・海外）との連携—』神田外語大学共同研究プロジェクト研究成果報告書，33-52.
- 青木ひろみ（2012b）「海外「日本語ティーチングアシスタント・アシスタント」プログラム—実習生を繰り出す側の取り組み—」『神田外語大学日本語教員養成課程の展望—「日本語教育実習」の多様化及び地域（国内・海外）との連携—』神田外語大学共同研究プロジェクト研究成果報告書，75-91.
- 青木ひろみ・Pornsri Wright（2013）「神田外語大学「日本語ティーチング・アシスタント」プログラム」タイ国日本語教育研究会第25回年次セミナー分科会資料.
- 青木ひろみ・Pornsri Wright（2014）「タイ人大学生を対象とした「日本文化」「日本事情」—実習生による授業作りの実際から—」タイ国日本語教育研究会第26回年次セミナー分科会資料.

- 青木ひろみ・Pornsi Wright・小川翔平 (2018) 「日本語教員養成課程「海外実習」—大学連携日本語パートナーズ—」タイ国日本語教育研究会第30回年次セミナー分科会資料.
- 青木ひろみ (2018) 「「日本語教育実習」における自己調整学習—実習サポーターの視点から—」『神田外語大学紀要』第30号, 165-185.
- 国際交流基金関西国際センター (2004) 『初級からの日本語スピーチ』凡人社.
- 国際交流基金 (2010) 『日本語教授法シリーズ第11巻日本事情・日本文化を教える』ひつじ書房.
- 佐藤公治 (1996) 「学習の動機付け・社会的文脈」波多野諠余夫編『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会, 221-247.
- 佐藤公治 (1999) 『対話の中の学びと成長』金子書房.
- 田島信元 (2003) 『共同行為としての学習・発達—社会的文化アプローチの視座』金子書房.
- 中山圭栄 (2012) 「海外「日本語ティーチング・アシスタント」プログラム実習生の受け入れとその成果—ブラパー大学学生の日本語学習から—」『神田外語大学日本語教員養成課程の展望—「日本語教育実習」の多様化及び地域(国内・海外)との連携—』神田外語大学共同研究プロジェクト研究成果報告書, 111-121.
- Pornsi Wright (2012) 「Intercultural Training for a Teaching Assistant Program in Thailand」『神田外語大学日本語教員養成課程の展望—「日本語教育実習」の多様化及び地域(国内・海外)との連携—』神田外語大学共同研究プロジェクト研究成果報告書, 93-110.

## 参考資料

『日本語教育実習報告書』(2010~2017) 神田外語大学日本語教員養成課程